

杉本榮一教授年譜

種 瀨 茂

一九〇一年、明治三四年。

八月九日、出生。父豊三郎氏（明治五・五・五生）。母みつ氏（明治一〇・三・二五生）。一姉三妹あり兄弟なし。出生地、東京市京橋區南傳馬町二丁目一番地。家業、米穀商。

一〇月、深川區木場町一番地に轉居。

一九〇六年、明治三九年、（五歲）

四月、東京市明治尋常高等小學校附屬幼稚園（深川區）に入園。

一九〇八年、明治四一年、（七歲）

三月二五日、東京市明治尋常高等小學校附屬幼稚園を修了。

四月、東京市東陽尋常小學校（深川區）に入學。

一九〇九年、明治四二年、（八歲）

九月、家族とともに神奈川縣足柄下郡小田原町十字町四丁目に轉居。小田原町立第一尋常高等小田原小學校尋常科第二學年に轉入學。以後成績優秀、毎年優等生となる。

一九一四年、大正三年、（一三歲）

三月二五日、小田原町立第一尋常高等小田原小學校尋常科を卒業。

杉本榮一教授年譜

四月、神奈川縣立小田原中學校に入學。家族は東京に轉居。先生は小田原中學校寄宿舎に生活。成績全甲。

一九一六年、大正五年、(一五歲)

四月、東京府立第一中學校第三學年に轉入學。成績優秀。

一九一八年、大正七年、(一七歲)

四月、家族、青島に轉居。先生は伯父中村金次郎氏方(東京市芝區片門町二丁目一三番地)に寄寓。

一九一九年、大正八年、(一八歲)

三月、東京府立第一中學校を卒業。第一高等學校・東京帝國大學理學部數學科を志望するも、家庭事情のため斷念。東京高等商業學校を受験。

四月、東京高等商業學校に入學。クラス、鹿鳴會。東京市小石川區指ヶ谷町、中村清二氏(物理學者、現東京大學名譽教授・學士院會員)邸内に自炊生活。以後留學まで同所に住居。

一九二〇年、大正九年、(一九歲)

四月、東京高等商業學校、東京商科大学に昇格。先生、同大學豫科第二學年に編入。

四月より、アテネ・フランセに通學、フランス語を學ぶ。

四月より一九二二年三月豫科修了まで、二年間。東京外國語學校ドイツ語專修科に通學、ドイツ語を修得。

五月一日、東京商科大学申酉記念日にあたり新豫科學生の自治運動起る。ことに二年生を主力とする學課目改正要求(高商式諸課目——銀行論・貨幣論・簿記等——を減廢し、一般教養諸課目——哲學・自然科學・高等數學等——を増設せよという提案)を中心とす。先生この運動に参加、ことに數學課目増設に盡力。

一〇月二三日、第一回インターカレッジ・レガッタにおいて東京帝大に敗る。その夜深更まで、新豫科の本質・學問的使命を論じ自治運動の反省に及ぶ。

一九二一年、大正一〇年、(二〇歳)

一月、豫科自治運動、決議。

四月、豫科新學課目制度實現され、後の豫科諸課目制度の基礎をきずく。

一九二二年、大正一一年、(二一歳)

三月、東京商科大學豫科を修了。

四月、東京商科大學に入學。福田教授のプロゼミナールに参加し、K. Marx: Das Kapital, Bd. I, 1867. を讀む。

四月二一日、學制改革嘆願書に署名参加、學制改革運動に努力。

一九二三年、大正一二年、(二二歳)

三月、學部第一學年講義『經濟原論』(福田教授擔當)の試験に不合格となる。先生獨特の文字のためなりという。再試験の結果、甲となる。

四月、福田教授のゼミナールに参加。

四月、一橋會三科(本科・豫科・専門部)分立。先生、本科會創設に努力。

六月、一橋會本科學術部にS・P・S (Société de la Pensée Sociale 社會思想の會。初代部長、上田貞次郎教授)組織され、先生その創設に盡力。

九月一日、關東大震災。神田一ツ橋の校舎は三井ホールの外、震破・焼失。

九月一五日、京濱學生大會を開き、集る者五〇〇名、一橋震災善後委員會成立。先生、罹災學生救援事業(調査・學費貸與・救恤・職業紹介)に盡力。

一二月二日より二日まで、バラックに收容された罹災者に對する職業調査(福田教授指導)に、副委員長として盡力。

一九二四年、大正一三年、(二三歳)

一 橋論叢 第二十九卷 第五號

二月一四日、福田ゼミナルにて報告、『一般的過剰生産ノ能否ニ干スル Say; Ricardo; Malthus ノ論等』。
四月、家族、青島より大連に移る。

五月一九日、S・P・S、芝に労働學校を開く。先生これに参加、開校・運営に盡力。

五月二二日、福田ゼミナルにて報告、『マルクス恐慌論(其一)』。

六月二九日、卒業論文『資本増殖の無限性に關する若干研究』主としてマルクスの學說に就て』の初稿成る。

七月三日、福田ゼミナルにて報告、『マルクス恐慌學說(其二)』。

一〇月一六日、福田ゼミナルにて報告、『Spethoffノ過剰生産理論』。

二月一八日、福田ゼミナルにて報告、『限界利用ニ立脚スル Afatlonノ恐慌論』。

一九二五年、大正一四年、(二四歳)

二月二五日、卒業論文(前掲)の定稿完成。

三月三一日、東京商科大學を卒業。

四月一日、東京商科大學研究科に入學、福田教授のゼミナルに参加。一九二九年三月まで同研究科にて研修。

四月一五日、中央大學商學部講師。

一二月三〇日、論文『資本増殖の行程と社會の消費力に依る制限に就て』マルクス資本制生産販路必然行詰理論に關する一小研究』脱稿。(發表場所・日付等未詳)。

一九二六年、大正一五年、昭和元年、(二五歳)

七月一九日、論文『マルクス「産業豫備軍」の説に對するオッペンハイマーの批評を駁す』脱稿。(發表場所・日付等未詳)。

一九二七年、昭和二年、(二六歳)

八月ころ、福田先生の勧めにより『ロシア—英國經濟學史論』の譯業を始め。福田先生の校閲加朱を受け、譯業に辛苦す。

一九二八年、昭和三年、(二七歳)

三月二十九日、父豊三郎氏大連にて逝去。

四月、家族大連より歸國、先生と生活を共にする。

一月一〇日、翻譯『ロッシア—英國經濟學史論』譯業完了。

一九二九年、昭和四年、(二八歳)

一月一七日、經濟學研究のため滿二年ドイツ國へ留學、文部省より發令さる。

三月二〇日、東京商科大學附屬商學專門部助教。

三月二五日、留學のため東京を出發。乗船白山丸横濱を出帆、歐洲航路の途につく。

五月五日、マルセイユ (Marseille) 泊。

五月六日、リヨン (Lyon) 泊。

五月八日、パリ (Paris) 着。

五月一四日、パリ發。

五月一六日、ベルリン (Berlin) 着。

五月一九日、ゲーリッツ氏 (A. Goeritz: Freisingerstr. ; 21 Schönberg, Berlin.) 方に下宿。

六月一七日、ベルリン大學付屬外國人學校 (Deutsches Institut für Ausländer an der Universität Berlin) に入學、語學を
研修。

七月、同校にて、ポツダム (Potsdam)、シュプレワルト (Spreewald) 等に遠足旅行。

九月初、新庄博氏・町田實秀氏らとともに、ドレスデン (Dresden)、ライプチヒ (Leipzig)、マイナール (Weimar)、アイゼ

ナハ (Eisenach) 方面に旅行。ライプチヒ郊外にてロッシア (W. Roscher) の墓に詣る。

十一月一日、ベルリン大學附屬外國人學校の最上級を卒業。

十一月九日、ベルリン大學 (Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin) に正規學生として入學。同大學冬學期(一九三〇年
三月まで)にて次の講義を聴く。ソムバート教授・經濟學方法論 (Prof. Sombart; Verfahrenlehre der Wirtschaftswiss-

nschaft) ハントル教授・欲求充足論 (Prof. Gotto-Ottolilienfeld; Die Lehre vom Bedarf und seiner Deckung) ノー
マン教授・貨幣および銀行 (Prof. Wagemann; Geld und Banken) ロンン教授・經濟財政統計 (Prof. Lorenz; Wi-
rtschafts- und Finanzstatistik) マーヤン教授・演習 (Prof. Wagemann; Übungen)。なほ一九三〇年九月キル
リン滞在中、終始ヘルリン景氣研究所 (Institut für Konjunkturforschung, 所長マーヤン教授) にて學ぶ。
一二月二四日、ヘルリン交響樂團 (Das Berliner Sinfonie-Orchester) 國立合唱團・ワーム聖歌團 (Staats- und Domchor) 指
揮リューデル (Prof. Hugo Riedel) にて、ブラームス作マイン鎮魂曲 (Ein deutsches Requiem von Johannes Brahms,
op. 45) を歌へ。

一九三〇年、昭和五年、(二九歳)

二月二〇日、國立歌劇場 (Staatsoper) にて、アイルチイ作アイーダ (Aida von G. Verdi) を歌へ。

四月、中村幸四郎氏とともに、プラハ (Prague) ヴィーン (Wien) ミンヘン (München) 方面に旅行。その後同年九月キ
ルリン滞在中、同氏とともに數學を勉學。R. Courant: Vorlesungen über Differential- und Integralrechnung. 2
Bde. Berlin, 1927 u. 1929, 等を讀む。

四月一五日、ヘルリン大學夏學期 (同年九月まで) にて次の講義を聴く。ワーゲン教授・景氣概論 (Grundzüge der Konjun-
kturlehre)、同教授・演習、ギルトキーヴァイツ教授・統計汎論 (Prof. von Bortkewicz; Allgemeine Theorie der Sta-
tistik)。

五月一日、ヘルリンのメーデー集會に加わる。

五月八日、福田徳三先生逝去。

五月二六日、イタリー、アメリカ合衆國を留學國に追加、文部省より發令せらる。

六月二六日、映畫『西部戦線一九一八年』(G. Westfront 1918, Vier von der Infanterie) 監督マントル G. W. Pabst) を見ゆ。

七月より九月まで、ユルシユ (Karl Korsch) と親交。

八月二二日、映畫『戦艦ポチョムキン』(„Panzerkreuzer Potemkin“ 監督ハイゼンシテイン S. M. Eisenstein) を見ゆ。

八月二二日、フリードリッヒスハイン (Friedrichshain) の革命戰士の墓地を訪れ、カール・リープツキョー (Karl Liebkne-

ché)、ローザ・ルクセンブルグ (Rosa Luxemburg) 等の裏に詣す。

九月二四日、レッシング劇場 (Lessing Theater) に、Piscator-Bühne 公演『Des Kaisers Kulis (Theodor Privat 作)』をみる。

九月二五日、ヘルリン大學夏學期を終了。

一〇月、キールに移り、ザッラー夫人方に下宿。(Frau Gehr. Sauer; Lindenallee 20, Kiel.) キール大學 (Christian-Albrechts-Universität zu Kiel) にて研究。同大學附屬世界經濟交易研究所 (Institut für Weltwirtschaft und Seeverkehr an der Universität Kiel) 『景氣研究ゼミナール』に参加す。(同ゼミナールの状況については先生の論文『ゼミナールの二つの型』一橋新聞、昭和一〇年一〇月二八日號を参照)。

一九三一年、昭和六年、(三〇歳)

六月ごろ(?)、フランクフルトに移り、グンツェンホイザー氏方に下宿 (Gunzenhäuser; Liebigstr. 24 III, Frankfurt am Main)。フランクフルト大學 (Preussische Staats-Universität zu Frankfurt a/M.) をよび同大學附屬社會研究所 (Institut für Sozialforschung an der Universität Frankfurt a/M.) に學ぶ。グロスマン (H. Grossmann) 等と親交。

七月三日、在留二カ年滿期後、さらに一年(一九三二年三月二〇日まで)私費滞在、文部省より許可さる。

一九三二年、昭和七年、(三一歳)

二月、イタリー旅行よりフランクフルトに歸る。

四月一六日、フランクフルトを出發、イギリス、アメリカ合衆國を經由、歸國の途につく。途次、渡米のレオンティエフ (Wassily Leontief) と行をともし談話。

五月一九日、乗船龍田丸横濱に入港。三年間の留學をおえ、東京に歸着。

五月二八日、歸朝談『漲ざる社會不安 最近のドイツ社會と學會』、『一橋新聞』第一五四號に所載さる。

六月一五日、東京商科大学附屬商學專門部教授。學生の理解者、相談役、そしてすぐれた導き手となる。

一 橋論叢 第二十九卷 第五號

六月、東京市杉並區井荻町荻窪二丁目に轉居。

一九三三年、昭和八年、(三二二歳)

二月、東京市杉並區井荻町荻窪三丁目二六番地に轉居。

四月より翌年三月まで、東京商科大学附屬商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講讀)。

五月四日、日本統計學會第三回總會(於大阪)に出席、會員となる。

十一月、東京府下小金井村一七八四番地に轉居。

一九三四年、昭和九年、(三三三歳)

四月より翌年三月まで、東京商科大学附屬商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講讀)。同專門部ゼミナール、テキスト、マニシアル『經濟學原理』。

四月一三日、日本統計學會第四回總會(於東京)研究報告部會第二日に報告、『需要曲線の統計的確定』。(一九三五年四月一日、次の如く改題し發表。『價格及び分量に關する市場統計を基礎とする、需要曲線の數量化について——わが國に於ける米穀を例として——』)。

一〇月、東京府武藏野町吉祥寺三〇六九番地に轉居。

二月二〇日、日本學術振興會第三(經濟)常置委員會、第六小委員會(米穀關係)、第二部門(一)米穀需要法則研究における中間報告として、要綱『米穀需要曲線の研究』を提出。(この研究の成果は、一九三五年七月二〇日、著書『米穀需要法則の研究』として刊行)。

二月二一日、日本經濟學會創立、先生その會員となる。

一九三五年、昭和一〇年、(三四四歳)

四月より翌年三月まで、東京商科大学附屬商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講

讀)。同専門部ゼミナール、テキスト、マニシアル『經濟學原理』。

四月二三日、日本統計學會第五回總會(於神戸・大阪)、研究報告會第一日にて報告、『米穀の具體的需要法則について』。(一九三六年三月二三日、次の如く改題して發表。『高米價政策の消費者に及ぼせる諸影響』)。

七月九日、杉村廣藏助教授の學位請求論文をめぐり東京商科大学内は紛糾。七月三〇日、學園の清新と學問的氣風刷新を期すといふ助教團聲明發せらる。先生これに署名、終始その中心に立つて盡力さる。

秋、早稻田大學政治經濟攻究會にて講演、以後一九五二年まで、前後五回講演。

一九三六年、昭和十一年、(三五歳)

四月より翌年三月まで、東京商科大学附屬商學専門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776, 講讀)。四月より六月まで、同専門部ゼミナール、テキスト、シニピートホフ『景氣理論』。

四月より翌年三月まで、關東學院高商部講師として出講。

一月二二日、日本經濟學會第三回大會(於東京)第二日研究報告會にて報告、『一般均衡理論に對する若干の疑問——パレットのマーシャル批判に因みて——』。(この報告は、一九三八年八月一〇日、加筆改稿の上、一九三九年一月五日、『東京商科大学研究年報 經濟學研究 6』に發表)。

冬、Econometric Societyの會員となる。

一九三七年、昭和十二年、(三六歳)

二月、東京市中野區千光前二五番地に轉居。

四月一〇日、松田利吉氏第三女實枝子氏と結婚。

四月一〇日、東京商科大学講師。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『經濟原論』。同附屬商學専門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776, 講讀)。この年度、専門部ゼミナールなし。

一橋論叢 第二十九卷 第五號

一九三八年、昭和十三年、(三七歳)

一月より二月まで、東京商科大學國立學會一橋論叢編輯委員。『一橋論叢』第一・二卷を編輯發刊。

一月一〇日、東京市中野區城山町三十六番地に轉居。

四月より翌年三月まで、東京商科大學學部講義『經濟原論』。同附屬商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講讀)。同專門部ゼミナール、テキスト、高田保馬『經濟學概論』次に、東京朝日新聞社經濟部『物價高を衝く』。

四月より二月まで、マシヤル『經濟學原理』讀書會を指導。學部一年生六名が參加。

四月四日、日本統計學會第八回總會(於京都)にて評議員に選出さる。以後一九五二年まで評議員として(一九四六年一月以後は理事・評議員として)學會の運営に盡力。四月五日、研究報告部會第二日、共同研究報告の一として報告、『計量經濟學』の最近の發達について』。

四月、學界終了後、静岡縣伊豆修善寺に旅行、夫人同伴。

一〇月一〇日、マシヤル讀書會、東京府下秋川溪谷ハイク。

一九三九年、昭和十四年、(三八歳)

一月、静岡縣伊豆伊東に旅行、夫人同伴。

三月二十九日、東京商科大學教授を兼任。

四月より翌年三月まで、東京商科大學學部講義『經濟原論』。同學部第一回プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money, 1936。

四月より翌年三月まで、東京商科大學附屬商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講讀)。四月より六月まで、同專門部三年生ゼミナール、各自自由テーマにて報告。

四月五日、日本統計學會第九回總會(於東京)研究報告部會第二日、共同研究報告の一として報告、『ムーアの具體的動態的均衡理論とその批評』。

一〇月九日、東京商科大學學部ゼミナール、群馬縣法師温泉に旅行。

一〇月より翌年二月まで、東京商科大学附属商學專門部一年生ゼミナール、テキスト、ゴットル『民族・國家・經濟・法律』。

一九四〇年、昭和十五年、(三九歳)

四月一日、東京商科大学各務基金により東亜經濟研究所創設。先生その統計部長となる。

四月五日、日本統計學會第一〇回總會(於大阪)研究報告會第二日にて報告、『聯關財需要の計量經濟學的研究』。

四月、同學會終了後、京都・奈良方面を旅行、夫人同伴。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money, 1936. 同ゼミナール、各自自由テーマにキ報告。

四月より翌年三月まで、東京商科大学附属商學專門部講義『經濟原論』、『經濟英語』(A. Smith: Wealth of nations, 1776. 講讀)。同專門部二年生ゼミナール、テキスト、ゴットル『民族・國家・經濟・法律』(前年度より繼續)次に、高田保馬『經濟學概論』。

五月一七日、日本經濟政策學會創立大會(於東京)にて報告、『經濟統制と流動性原則』。(この報告は、同年七月一日、『一橋論叢』第六卷第一號に収録。)

七月七日、日本統計學會、國民所得に關する研究委員會、第三回集會にて報告、『マルシャックの社會的需要曲線導出の方法』。

九月一二日、東京商科大学國立學會研究年報編輯委員。

一二月二〇日、東京商科大学附屬商學專門部教授を兼任。

一二月二四日、日本經濟學會第七回大會(於東京)にて常任幹事に選出され、同學會の運営に當る。

一二月二五日、日本統計學會、國民所得に關する研究委員會、第四回集會にて報告、『家計調査に基く需要曲線に就いて』。

一九四一年、昭和十六年、(四〇歳)

二月、東京商科大学一橋會解散。四月、東京商科大学報國團結成。先生、ひき續き本部理事として、學生とともに、運営に當る。

ことにこの間、報國團の形式のもとに舊一橋會の性格を生かさんと、非常な努力を學生とともに傾く。

四月六日、日本統計學會第一回總會(於東京)研究報告部會第三日に、共同研究報告の一として報告、『本邦家計調査を基礎と

一橋論叢 第二十九卷 第五號

してみたるエンゲル法則』。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936。同ゼミナール、各自自由テーマによる報告。

四月より六月まで、同學部特殊ゼミナール、テキスト、E. Lindahl: Studies in the theory of money and capital. London, 1939。

四月より翌年三月まで、同附屬商學部講義『統計學』。同専門部三年生ゼミナール、テキスト、高島善哉『經濟社會學の根本問題』。同一年生ゼミナール、テキスト(同年二月以後)、高田保馬『第二經濟學概論』。

四月より翌年三月まで、明治大學商學部講師として出講。

五月一三日、内閣統計局より東京商科大学附屬東亞經濟研究所に對し、家計調査改正の立案企畫を委囑。先生、同研究所統計部長としてこれに當る。改正により、調査範圍が擴大された上、その内容は精密極まるものとなつた。

八月、静岡縣伊豆熱川に旅行、夫人同伴。

九月二五日、東京商科大学學部ゼミナール、多摩川梨園にハイク。

十一月二七日、日本經濟學會第八回大會(於京都)常任幹事として總會にて會務會計報告。同日午後、共同論題『統制經濟の諸問題』研究報告會にて報告、『經濟國力の測定』。

十一月二九日、日本統計學會、國民所得に關する研究委員會、會合(於京都)にて報告、『昭和十六年度家計調査方法について』。

十二月五日、富山縣教育會館における家計調査打合せおよび座談會に出席。(翌一九四二年三月、『家計調査の語』として富山縣に
より發行)。

十二月八日、太平洋戰爭開始。先生歸京。

十二月二〇日、内閣統計局事務囑託解除。

一九四二年、昭和十七年、(四一歳)

一月三十一日より六月二〇日まで、戦時生活相談所主催標準生計費研究會を司會。(前後八回研究會開催。その狀況は、同年九月三日、同相談所刊『標準生計費の研究』として發表さる。)

二月二八日、東京商科大学附屬東亞經濟研究所官制施行。先生、ひき續き同所員・統計部長。

四月より九月まで、東京商科大学學部(昭和一七年度第一次)講義『經濟學特殊問題』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936。同ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。同學部特殊ゼミナール、テキスト、マーシャル『經濟學選集』。

四月より九月まで、同附屬商學專門部講義『經濟原論』。同專門部二年生ゼミナール、テキスト、高田保馬『第二經濟學概論』(前年度より繼續)。

八月、箱根・早雲山に旅行、夫人同伴。

一〇月より翌年九月まで、東京商科大学學部(昭和一七年度第二次)講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936。

一〇月一五日、戦時職務として南方軍軍政總監部付き(擔任業務、農業水産畜産調査)を陸軍省より命ぜられる。

一〇月二四日、ゼミナール、東京商科大学町田山寮(新潟縣妙高池の平)に旅行。

十一月二五日、福岡雁の巢空港を出發。バンコック(Bangkok)經由、一二月二日、シンガポール(Singapore)着。同地にて南方地域經濟調査要綱立案に努力。

一九四三年、昭和一八年、(四二歳)

二月より三月にかけて一カ月間、スマトラ(Sumatra)において農園(Estate)調査。

四月二六日より五月にかけて一カ月間、ジャバ(Java)全島にわたり、農園および原住民農業調査。

六月五日、福岡雁の巢空港に歸着。

六月三〇日、南方軍軍政總監部付きを免ぜらる。

七月、東京商科大学時局特別委員會委員。

八月、北海道へ旅行。

九月二三日、厚生省専門委員會委員。國民生活調査を擔當。

一〇月より十一月まで、東京商科大学學部講義『統計學』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. R. Hicks: Value and capital.

一橋論叢 第二十九卷 第五號

1939. 同學部ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。

一〇月一六日より一八日まで、學部ゼミナール、妙高山寮に旅行。

一〇月二九日、大日本拓植學會第二回大會にて報告、『ジャワにおける原住民農業及びエステート農業の特質とその相互關係について』。

一二月一日、「學徒出陣」。プロゼミナール、参加者四名となる。

一九四四年、昭和一九年、(四三三歳)

二月七日、東京商科大学教授報國團第一回總會における報告、『國民的標準生計費の觀念』。(その序論は、同年四月一〇日、『一橋論叢』第一三卷第四號に發表)。

三月二八日、大藏省共榮團財政金融調査協議會委員。經濟事情調査を擔當。

六月二一日より九月四日まで、行政查察使隨員。食糧行政查察を擔當。

八月、東京商科大学附屬東亞經濟研究所、研究部長を兼任。

九月より一二月まで、東京商科大学學部プロゼミナール、テキスト、杉本榮一『統制經濟の原理』。一二月より翌年三月まで、参加者二名にて、プロゼミナール行わる。

一〇月一日、東京商科大学、東京産業大學と改稱。一〇月二〇日、東京産業大學豫科教授を兼任。

一九四五年、昭和二〇年、(四四四歳)

三月、東京市中野區城山町住居附近の建物強制疎開に従事。

四月より九月まで、東京商科大学學部プロゼミナール、テキスト、高田保馬『第二經濟學概論』。

四月、中野區谷戸小學校における國民兵訓練に参加。

五月二四日、米空軍の東京大空襲に際し、中野區城山町住居附近の防火に盡力。

六月九日、夫人・母堂、東京府下淺川町字原 井上らく氏方に疎開。同年一二月八日歸宅にいたるまで、先生は中野・國立・淺川の間に終始往復さる。

六月より七月まで、内閣統計局より東京商科大学附屬東亞經濟研究所に對し書物寄贈。先生、激しい空襲下に、その連絡・受け入

れに盡力。(右の書物は、現在『富士見文庫』として一橋大學經濟研究所に所藏さる。冊數一〇六四冊、重要統計書を含む)。

八月一日、未明、米空軍の八王子方面空襲に際し、疎開先附近の防火に盡力。

一〇月より翌年三月まで、東京産業大學學部プロゼミナール、テキスト、マーシャル『經濟學原理』。復員歸校學生次第に増加し、プロゼミナールに参加。

一九四六年、昭和二十一年、(四五歳)

二月二七日、内閣食糧對策審議會委員。食糧事情調査を擔當。

四月より翌年三月まで、東京産業大學學部講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、A. Smith: Wealth of nations,

1776, 同學部ゼミナール、(一)グループ、テキスト、A. Marshall: Principles of economics, 8 ed. 1920, (二)グループ、テキスト、K. Marx: Das Kapital, Bd. I, 1867.

七月一三日より、山形縣温海温泉・鶴岡へ旅行、夫人同伴。同月二三日、五十川炭鑛視察、坑内切羽まで見學。

九月三日、文部省人文科學委員會設置。先生、その第五部(經濟學)委員。以後一九四九年二月にいたるまで、第五部主任あるいは常任委員として、學術研究の助成・學界の振興に盡力。

九月一八・一九日、人文科學委員會第一回總會。先生、第五部主任に選出さる。

秋、日本經濟學會戦後第一回會合(於東京)に出席、以後同學會の再編に盡力。

一〇月、東京産業大學學部ゼミナール、妙高山寮に旅行。

十一月二六日、東京産業大學教職適格審査委員會にて適格と判定。

一九四七年、昭和二十二年、(四六歳)

三月二四日、東京産業大學、東京商科大學と改稱。

三月二七日、人文科學委員會、第五部學術大會にて報告、『經濟の再建と價值法則』。(右報告の要旨は、同年六月一日、『人文』第一卷第二號に所収さる。)

一橋論叢 第二十九卷 第五號

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『統計學』、『經濟學特殊問題(價格理論)』。同プロゼミナール、(一)グループ、テキスト、K. Marx: Das Kapital. Bd. I. 1867. (二)グループ、二年生ゼミナールと合同、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936. 同ゼミナール、(一)二年生グループ、プロゼミナール第二グループと合同、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936. (ただ、十一月以降は、各自自由テーマにつき報告。)

四月より翌年三月まで、東京商科大学豫科講義『經濟通論』。

五月一九日より一九四九年五月一八日まで、東京商科大学教職適格審査委員會委員。

六月一日、ゼミナール、東京都下村山貯水池にハイク、夫人同行。

六月八日、東京商科大学立案委員會委員。四學部制による新制一橋大学の制度を審議立案す。

六月三〇日、東京商科大学經濟研究所の所員および統計部長を辭す。

七月、ゼミナール、東京商科大学富浦臨海寮(千葉縣富浦)に旅行。

八月、茨城縣磯原に滞在、執筆に従事、夫人同伴。

八月二五・二六日、學術體制刷新委員會第一回總會。先生、その經濟學部門委員。學術研究の民主的・綜合的組織を計畫審議す。

一〇月六日、東京商科大学經濟研究所改革に關する相談役會に参加。舊東亞經濟研究所より新經濟研究所への轉化に際して、機構・人事等の重要問題を審議。

十一月三〇日、人文科學委員會第五部學術大會(於京都)にて公開講演、『近代理論經濟學の系譜』。(右講演の要旨は、一九四九年三月一日、『人文』第三卷第一號に所収さる。)

一九四八年、昭和二十三年、(四七歳)

三月二七日、學術體制刷新委員會第八回總會にて審議完了。内閣へ報告を提出。これに基づき、同年七月一〇日、日本學術會議法成立公布さる。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、K. Marx: Das Kapital. Bd. I. 1867. 同學部ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。

五月一四・一五日、人文科學委員會第五部主任を辭し、常任委員に選出さる。

八月、靜岡縣伊東に旅行、執筆に従事、夫人同伴。

九月八日、内閣公職適否審査委員會にて非該當と判定さる。

十一月四日、文部省大學設置委員會臨時委員。

十二月二〇日、日本學術會議會員選舉（全國區）に當選。

一九四九年、昭和二十四年、（四八歳）

一月二〇日、日本學術會議會員に就任。第一回總會にて第三部（經濟學・商學部門）幹事に選出さる。一九五一年一月一九日任期終了まで、その運営に盡力。

二月二二日、人文科學委員會委員を辭す。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『統計學』。同學部プロゼミナール、(一)グループ、テキスト、J. M. Keynes:

The general theory of employment, interest and money. 1936. (二)グループ、テキスト、K. Marx: Das Kapital, Bd.

I. 1867. 同學部ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。

六月末、新制一橋大學發足。

八月下旬より、北海道大學法經學部にて短期講義。小樽商科大学にて講演。九月一五日、歸京。

一〇月一〇日、統計數理研究所評議員。

十一月三日、ゼミナール、東京都下奥多摩へハイク。

十一月、夫人とともに靜岡縣伊豆伊東に滞在、著書『近代經濟學の解明』(上)を執筆。

一九五〇年、昭和二十五年、（四九歳）

一月二二日、日本經濟學會連合創設。先生、その創設に努力。さらに一九五一年一月まで、理事としてその運営に参畫し盡力。

四月より翌年三月まで、東京商科大学學部講義『經濟原論』。同學部プロゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936. 同學部ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。

一橋論叢 第二十九卷 第五號

四月より翌年三月まで、一橋大學（前期）講義『經濟通論』。

四月二三日、經濟學史學會第一回總會（於東京）。先生、その會員となる。

六月二五日、ゼミナール、三越劇場にて觀劇。俳優座公演、眞船豐作『猿蟹合戦』。

七月、一橋大學立案委員會委員。

一〇月八日、計量經濟學會 (Econometric Society) 日本支部創立大會（於東京）。先生、幹事に選出さる。同大會にて報告、『日本における計量經濟學研究の發達』。

十一月二日、日本經濟學會再編され理論經濟學會としてその第一回大會を開催（於神戸）。先生ひき續きその理事として盡力。

十一月二二・二三日、ゼミナール、神奈川縣箱根に旅行。

一九五一年、昭和二十六年、（五〇歳）

一月一九日、日本學術會議會員任期終了。

四月より翌年三月まで、東京商科大学・一橋大學（後期）講義『經濟原論』。東京商科大学學部ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。一橋大學三年生ゼミナール、テキスト、J. M. Keynes: The general theory of employment, interest and money. 1936. (ロンドン) R. F. Harrod: Towards a dynamic economics. 1948.

六月一日より三日まで、ゼミナール、千葉縣富浦臨海寮、白濱、小湊に旅行。

六月二五日、一橋大學大學院制度委員會委員。新大學院制度を立案審議。

八月、夫人とともに静岡縣伊豆修善寺に滞在、『近代經濟學史』を執筆。

九月一〇日、一橋大學評議員。學園最高運營機關に参畫、盡力。

一〇月一日より、茨城大學文理學部に講師として短期講義。

一〇月より十一月まで、神奈川縣鎌倉に滞在、『近代經濟學史』を執筆。

十一月六・七日、ゼミナール、静岡縣清水・静岡方面に旅行。先生、静岡大學文理學部に講演。

一九五二年、昭和二十七年、（五一歳）

四月より七月まで、東京商科大学・一橋大学（後期）講義『経済原論第二（理論経済学）』および『経済学史』。一橋大学三年生ゼミナール、テキスト、Harrod: 'Towards a dynamic economics. 1948. 一橋大学四年生および東京商科大学ゼミナール、各自自由テーマにつき報告。

四月より七月まで、東京大学経済学部講師、明治大学商学部講師として出講。

五月一日、文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会専門委員。

五月二九・三〇日、ゼミナール、静岡縣伊豆修善寺に旅行。

六月四日、日本銀行学會主催講義『現代経済学の展望』（於日本銀行本店）。

六月一四日、経済学史學會關東部會第一回會合にて報告、『近代経済学の諸問題』。

七月より八月まで、神奈川縣三浦、および夫人とともに長野縣上田に滞在、『近代経済学史』執筆に努力。

八月三十一日より、北海道大学法経学部に出講。九月一〇日、歸京。

九月一六日、東京都中野區城山町三六番地の自宅にて、『近代経済学史』を校正中、突然狭心症の發作にたおれ、中野組合病院に入院。

九月二十四日午後一時四五分、逝去。

一〇月五日、一橋大学兼松講堂において葬儀。

一〇月一九日、多摩靈園に納骨。

あとがき

一 この年譜は、杉本榮一先生の生涯と業績について、總體的考察と理解を行うための素材を集收し提出することを目指している。何よりもまず私の力不足と、また一部分は年譜という形式上の制約のため、十分その意にそいていないことを遺憾とする。ことに、先生の著作活動および二〇世紀前半にわたる生涯の社會的背景は割愛されている。讀者、是を諒とし、自ら補完せられんことを願う。

二 この年譜作成における資料は次の如くである。

a 非公開資料。(イ)、杉本家所蔵のもの。杉本先生の原稿・ノート・メモ・手紙・アルバム・藏書等（その一部を借覽）。杉本

杉本榮一教授年譜

一橋論叢 第二十九卷 第五號

ゼミナール報告・記録・卒業アルバム。(ロ)、一橋大學事務當局所蔵のもの。大學學籍簿、教職適格審査票(杉本先生自筆)、教授履歷書等。

b 公開資料。弔辭、追悼文、諸著作・新聞・雜誌等。

c 直接の談話および書簡等によりお話しをうかがいご教示を受けた方々は、杉本先生夫人、母堂をはじめ諸先生、同學諸兄、ならびに大學職員諸氏、約五〇名にのぼる。深く感謝の意を表す。

三 年譜中、毎年頭にかかげた年齢は、その年の誕生日における先生の満年齢を示す。

四 先生の著作活動に關してはすべて、別掲『著作目録』を参照せられたい。

五 留學(一九二九—三二年)中の記載は、濃淡ありことに不十分さを免れていない。映畫・演劇・音樂の觀照については多くの中からその一二を擧例したにとどまる。以て當時における先生の生活の一端をうかがいえたいと思ふからに他ならない。

六 私は、先生の生涯とその多面的な業績に深く學ぶことにより、今後ともこの年譜を充實してゆきたいと思ふ。誤りや不十分な點につき切にご教示を乞う次第である。

(一九五三・三・一五)